

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

英國で供用されている種牡馬フランケル（牡13歳）が、今月のこのコラムの主役である。「なぜ今、フランケル？」と小首を傾げる読者もおられようが、現役引退から10年近くが経ち、彼の現役時代を知らない競馬ファンも増えてきた中、その存在を改めてクローズアップすべきタイミングが今、訪れているのだ。

今年1月に亡くなつたアブドウーラ殿下が築いた競馬組織ジャドモントによる自家生産馬がフランケルだ。サー・ヘンリ―・セシル厩舎から2歳8月にデビューすると、ラストランとなつた4歳10月のチャンピオンSまで無敗の14連勝を達成。4歳時にはレイティング140を獲得し、世界統一機関による「フランケル」を史上最高馬と認めるとの見解が示されている。12万5千ポンド（当時でレートで約1850万円）の種付け料が設定され、絶大なる期待を背負つてフランケルが種牡馬入りしたのが、13年の春だった。

14年春に111頭の初年度産駒が誕生した中、フランケルにとってG1制覇第1号となつたのが、16年12月に阪神ジュヴェナイルファイリーズを制したソウルスタークリングだった。お膝元の欧州でも、G2口ウザース勝ち馬クイーンカインドリーを筆頭に、初年度産駒から5頭の2歳重賞勝ち馬が出現。英國と愛国の数字を合算をしたラレッジコマンサイヤーズ・ランキ

英國で供用されている種牡馬フランケル

ングで、第3位となつていて。

新種牡馬としては、すぐぶる良好な滑

り出しである。実際に立派な成績ではあるのだが、期待値が無限大だったことを考

えると、ム、ム、ムという、いささか微妙な反応が、関係者やファンからは聞こえていた。

初年度産駒からはその後、連覇を果したチャンピオンSを含めて4つのG1を制し、欧洲最優秀3歳牡馬のタイトルを手にしたクラックスマンが登場。これを皮切りに、フランケルは様々なカーブゴリーにおける活躍馬を続々と送り出していく。

セントジェームスパレスSを制したウイズ

アウトパロールや、ファルマスSを制したヴァレイシャスといったマイル路線のG1

勝ち馬を出す一方、フランケルは気持ちを抑えられない子が多いとの説りを受け

つつも、カドラン賞勝ち馬コールザワイン

ドや、セントレジャー勝ち馬ロジシャンといつた長距離路線の大物を輩出した。英

国にクオドリラテラルという2歳牝馬女

王が出現すると、日本ではモズアスコット

というダートのG1勝ち馬が登場。そして、

19年にはアナパークが英オークスを制し、

英國クラシック初制覇を飾っている。

英國と愛国の総合リーディングでは、

初年度産駒が4歳となつた17年に早くも4位に台頭。18年が3位、19年も3位と上位の常連となり、トップサイヤーの仲

間入りを果たした。

繰り返すが、立派な成績である。立派

なのだが、ファンが漠然と感じていた消化不良には理由が2つあって、1つは、フランケルが持っていた爆発的なスピードを繼承する短距離路線の大物が出ていないことだつた。種牡馬フランケルは、むしろそ

ちらのベクトルに向かうことを想定してい

たファンが少なくなつたのである。そして、

フランケルのもう1つの要因が、牡馬のクラシック勝ち馬を出していないことだつた。

その2つめの縛めが解かれたのが、21年だつた。5世代目の産駒から、英ダービーを制した後、返す刀でキングジョージを制したアデイヤー、愛ダービーとパリ

大賞を連覇したハリケーンレーンが現れたのだ。7月24日のキングジョージが終了した時点で、フランケルは英國と愛国リーディングで、今年7月に他界した2位のガリレオに75万ポンドの差をつけ、首位の座に立つている。

フランケルがついに、種牡馬としても怪物ぶりを發揮し始めたのだ。2010年から11年連続でリーディングの座を守つて

きた父ガリレオを、息子フランケルは引きずりおろすことができるかどうか。欧洲競馬後半戦の大きな見どころとなりそうである。